白桃の歌

冨士家 瑠香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白桃の歌

【Ｎコード】
Ｎ０３３８Ｉ

【作者名】
冨士家　瑠香

【あらすじ】
誰がなんと言おうと、普通の、普通の、男子高校生。ちょっと人と違うところといえば、未だに声変わりしていない事くらい。そんな白桃歩（ハクトウアユム）が目撃したのは、美少女・八重木ことは（ヤエギコトハ）の小指にまとわりつく・・・「怪異」・・・？

Yaegi kotoha 001

八重木（ヤエギ）　ことは。

うちの学校では、
・・・いや。
学年では・・・かな。
知らない人など居ない、生粋の美少女。
しかも、その有名人は、僕と同じクラス。
しかも、その有名人は、僕と隣の席。

美少女というと・・・なんだろう。病弱な、白い肌。そんな事を連想するのは、僕が馬鹿だからかもしれない。いや、実際、八重木はそんな感じだけどさ。

窓際の、真っ白なカーテンがなびく席。八重木はそこで、本を読んでいる。一心不乱に・・・と言うと、イメージが違うかな。とりあえず、なんとなく、回りの世界と自分との間に、見えない壁を、築いていくように。

「・・・夢オチ・・・・・・・・・・・・・。」

今日は日曜日。共に一歳ちがいの姉&妹に叩き起こされ僕はつぶやく。

「夢・・・・・・・・・・・・オチ・・・・・・・・・。」

さっきまで僕の瞳に鮮明に映っていた八重木の姿は、どうやら僕の

夢の中の姿だったようだ。でも、なんつうか・・・正夢？
教室で見る八重木の姿は、まさにさっきまでの夢と同じものだった。

「兄ちゃ～～～～～～～～ん！牛乳買って来い！！！」
妹に朝っぱらからパシリにされた哀れな高校生（残念ながら僕だ）
は、すごすごと近所のコンビニへ。

・・・行こうと思って、自慢のマウンテンバイクに鍵を差し込もう
としていると・・・。

「・・・八重木・・・・・・さん」

・・・が、居たのだ。
無論、僕の家の前を通りかかっただけのようだが・・・。

「！！」

八重木、ことは。

彼女の・・・小指。
左手の・・・小指。

そこには・・・その周りには・・・

真っ黒な、見ていると引き込まれていきそうな、
黒い、黒い、もやのようなものが、ただよっていた。

Ｙａｅｇｉ　ｋｏｔｏｈａ　００１（後書き）

初めて小説とか書いちゃいました。

もうドッキドキです（，ｖ，＊；；）

しかも、初心者の癖していきなり連載ものを書いてみたり・・・・・・・・。

よければ読んでいってくださいｗ

Yaegi kotoha 002

「八重木ことはッ？」
僕が言った言葉を、ちぃはそのまま聞き返す。
「うん。八重木ことは。」
そのまま僕も言い返す。

ちょい補足。ちぃっていうのは僕の妹・・・白桃ちぃ、だ。
ほら、朝っぱらから僕をパシリにした張本人・・・覚えてる？

「八重木ことは・・・なんか聞いたことあるよッ」
「本当か？！」
「ほら・・・あの・・・えっとぉ・・・ッ」

ちぃが悩んでる・・・こいつ、悩むと完璧に解決するまで引かないんだよなぁ・・・。　面倒くさい。
それにしても、さっき見た八重木の左手小指・・・。
なんだったんだろう。
今ちぃに八重木の名前をしっているか聞いているのは、
あの不可思議な左手小指の正体を相談する、前置き。
黒い、黒い、闇のような・・・もや。
今度こそは、夢オチなんかじゃなく、現実だった。
八重木の小指に不可思議がもやがついてるのは、現実だった。
現実だった。現実だった。現実だった。

「あっ！！あれだぁッ！！！」

ちぃが叫ぶように言う。

「ほらあの・・・紙たべるやつッ！！」
「それはヤギだッ！！！」

ちくしょう・・・ボケられたから思わずツッコんじゃったし・・・。

「いや、いや、ちぃさん・・・真面目にお願いします」
なぜか妹にむかって敬語を使ってしまう男子高校生がここに居た。
「んん。ん～・・・八重木ことは・・・やえぎ・・・ッ」
「・・・」
「あっ！！あれだぁッ！！！」

ちぃがまた同じ台詞を叫ぶ。

「ほらあの・・・八重霧って聞いたことないッ？」
「やえぎり？」
「広辞苑　やえ一ぎり【八重霧】幾重にも立つ霧。永久百首「彦星は天のおしでの一に」」
「ちぃお前・・・広辞苑を丸暗記してやがるのか・・・」
「うん。当然だしッ」
「真面目に相談にのってくれてとても有難いが、兄としては学力の差を噛み締める悲しい現実を物語る会話になったようだぞ・・・」

てか、八重霧。
幾重にも立つ霧。
幾重にも。
幾重にも。
まるで何かを・・・隠そうと・・・するように。

「ていうか兄ちゃん、牛乳買ってきたわけッ？？」
「・・・・・・・・・・・・・。」

そうでした。ごめんなさい。すみません。誠に申し訳ありませんでした。

心にも無い・・・わけでもない謝罪の言葉を並べつつ、僕は玄関を出た。

Yaegi kotoha 003

「動くな、手を上げろ！」

・・・・・・・・・・・・・・・。

なにこれ。

そんな、昔風の刑事ドラマみたいなクサい台詞に素直に応じてしまった男子高校生。

残念ながら、それは僕だった。

ていうか、誰だ・・・

僕は振り向いて、確かめようとし・・・

「振り向くな！！！」

・・・・・・・・・。

ごめんなさい。

一般高校生男児の思考回路などお見通しですか。

だとしたらもっと気になる。

コイツ誰だ・・・。

「お前、誰・・・」

僕は、振り向かないようにして言った。

「あぁら、白桃くん。この声、聞き覚えないかしら？」

・・・うん。無い。
けど、今の台詞で女だということは分かったな・・・。

「くだらない詮索趣味も生半可でやめたらただの命取りよ、白桃くん」
「くだらない・・・詮索趣味・・・？」

どういう意味なんだろう。
詮索・・・。
詮索。
詮索・・・？

「八重木・・・ことは・・・？」
「そう。よくわかったわね、大正解～～～～」

八重木、ことは。

病弱、白い肌。
生粋の美少女。
僕と同じクラス。
僕の隣の席。
窓際の、爽やかな席。
揺れる、白いカーテン。
いつも、本を読んでいる。
周囲から、孤立するように。
周囲から、独立するように。
周囲との、壁を築いているように。

いつも、本を読んでいる。

そういえば、八重木の声なんて聞いたことが無い。
授業中に、あてられる事すら八重木には無い。
先生から、存在を忘れられているかのように。
周囲から、存在を忘れられているかのように。
周囲から、存在を忘れられているように。
周囲から、存在を忘れられている。

「何を考えているのかしら、白桃くん」

・・・。これが、八重木の声。
儚く、可憐な。
存在自体が儚く可憐な、八重木によく似合う声。
存在自体が儚く・・・
存在が、儚く・・・？

「何か重大な悩みでもあるの？私みたいな超絶美少女を前にしていても考えるほど重大な？」

うわ。
自分で超絶美少女とか言いやがった。
どんどん僕の中の八重木のイメージがこわれていく。

だいたい、前にしてないし。
童謡風に言うなら、後ろの正面ってとこか？

「ん？超絶美少女が自分でそう名乗ったって、なんら問題はないで

しょう？事実だもの」

ちょ・・・読心術？！

「読心術じゃないわ。白桃くん、顔に書いてあるもの。」

書いてねえよ・・・。

「そうね。そう言うと思ったから、昨日のホームルームの時間に書いておいたの」

「どんだけ用意周到なんだよ！！！」

ついにツッコんでしまった。

「まぁ・・・そうね、そろそろ本題に入ってしまおうかしら」

「・・・？」

「白桃くん、（本題？もしかして僕に告白するのか？）って思っているようだけど。案外白桃くんは今、危機的状況に立たされているのよ。」

「・・・・・・・・・・・・。」

断じて、思っていない。

告白されるなんて、思っていない。

でも、危機的状況とも、思っていない。

「あれ？危機的状況がわからないの？まあ、男子は力も強いし、なにかあったら暴力にうったえればいいと思っているのね。そんなの明らかな男尊女卑よ。」

こんな美少女相手に、暴力にうったえる方がおかしいと思うけど。
でも、何故、今、僕が危機的状況なのかはマジでわかんない。

「・・・そうね・・・。じゃあ白桃くん、もう振り返ってみてもいいわよ」

くるり。

「・・・！！」

僕の首元には、サバイバルナイフが一本、突き立てられていた。

「甘いわね・・・すごく甘い。白桃くん、このナイフ一本見ただけで危機的状況の意味をわかったつもりでいるんでしょう？」

「どういう意味だ・・・」

僕が、「だ」と言葉を発した瞬間、目にも止まらない早さで口になにかが入った。

「・・・・・・・・・・・・・・・！」

サバイバル、ナイフ・・・。

「あれっ？白桃くん、これはまだ序の口なのよ？まだまだ危機的状況ではないわ」

サバイバルナイフ2本を片手で1本ずつ持っていた両手。

八重木は、首の方にやっていたサバイバルナイフを地面に捨て、
空いた手で胸ポケットからなにか取り出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

口の中にサバイバルナイフを入れられている僕は、無論しゃべることができない。
だが、八重木がポケットから出したものは、とんでもない代物だった。

瞬間決着剤。

あ、心の中なのに噛んだ。

正しくは、瞬間接着剤。

でもある意味、噛んだ言い方も間違ってはいなかったかな。
瞬間決着剤。

この、発端のわからない、予期せぬ勝負は、
僕の心の中では、とっくに決着がついてしまった。

Ｙａｅｇｉ　ｋｏｔｏｈａ　００３（後書き）

なんか、すごい展開になってきました。

自分でも予想不可能だ・・・。

行き当たりばったりで小説書くなんて、

私もダメな人間だなぁ・・・。

Yaegi kotoha 004

「あれ？いきなり随分しおらしい顔になったわねぇ？」

・・・。

なんなんだ、コイツ・・・。

瞬間決着剤・・・いわく、瞬間接着剤。

この状況でそんな代物見たら、誰だって・・・

「口を接着剤で閉じられると思うのかしら？」

「・・・が・・・ッ」

口の中にサバイバルナイフ・・・。

この状態でしゃべろうものなら、ずいぶんと無残な結果になるだろう。

しかも八重木、サバイバルナイフを歯に垂直にして入れているらしい。

つまり・・・

「そうね、しゃべれないのも当然よね。今の状態から少しでも、口を閉じようものなら。そりゃあ、口、切れちゃうしね」

今の言葉で、僕は確信した。

いや、正しくは、その口調と表情で、かな。

「言っておくわ。このナイフ、本当に良く切れるのよ。」

確信した。
確信した内容は、どうやら八重木に先を越されて言われてしまったが。

・・・。
それより、どうして僕は今、こんな状況に陥っているんだ？
僕が一体、八重木に何をしたというんだ・・・。

「あのね、貴方に言いたいのは、これだけよ。」
「・・・」
「くだらない詮索は止めて頂戴」

あぁ、そういえば、言ってたな。
詮索って。

「私が貴方に求めるのは、ただひとつ。もう二度と、人に私の事、言わないでもらえるかしら？」
「・・・」

この状態で、どう答えろと。

「そうね。ついでに、もうひとつあるかしら。」

一体なんなんだ。

「その、私の胸をジロジロ見るのも止めて頂戴」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

見てねぇ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！

「正直いって、気色悪いわ。」

断固、見ていませんから。

八重木って、俗に言う「自意識過剰」っていう類なのか？

「まぁ、その二つね。承諾いただけるなら・・・３回ほどうなずいて見せて。」

無理だ・・・。

そんな事したら、ナイフが・・・。

「うん、その、冗談ってものよ。まあでも、素直にうなずいてくれたら面白かったんだけど」

人の流血を見て喜ぶのか・・・？

「うなずくという選択肢は無理ね。じゃあ、手を３回叩いて。それが了承の合図よ」

「・・・・・・・・・・ッ」

「それ以外の動作は、一切禁止。敵対行為と見なして、攻撃にうつるわ。」

パン！パン！・・・パン！

３回、手を叩いた。

「そう。いいわね。」

僕は、口を間抜けに大きくひらいたまま、安堵のため息をつく。

「じゃあ、契約成立。」

八重木は言いつつ、ナイフをゆっくりと抜く。
僕はほっとして、今まで開けっ放しだった口を閉じようとする。

・・・と、その時。

「・・・・!!」

八重木は、素早い動作で地面に投げ捨ててあったもう一つのナイフを手に取った。
僕の、閉じる寸前の口に、それは差し込まれ、すぐに往復するように抜かれた。
唇をかすめる、刃物の感覚。
だが、一切、どこかが傷つけられる事は無かった。

僕は、少しホッとした。
また口の中にナイフを・・・入れられるかと、思った。
まあ実際、入れられはしたけど。すぐに抜いたみたいだし。

「・・・あら？気づいてないようね」

八重木があざ笑うように言う。

「最初は鼻にでもやろうかと思ったけど・・・。まぁ、文字通り良い口封じになったし？じゃあ、白桃くん。契約は、契約よ。ちゃんと守ってね。まあ、怖すぎて私に逆らったりはできないかしら・・・」

どういう意味だ。

言葉にしようとしたが・・・出来なかった。

どういう意味だ。

その答えは・・・自ら、解ってしまった。

上唇と下唇が・・・くっついている。

そうか、さっきのナイフ・・・。

あれにあらかじめ接着剤をぬっておいて、

僕の口に差込み抜くという動作で、接着した。

僕の首にナイフを突き立てる前から、

こうなる事を予測して・・・。

なんて用意周到な奴なんだ。八重木。

文字通り、良い口封じになった。

それは、こういう事だったのか・・・。

しかも、最初は鼻にでもやろうかと思ってたけどとか言ってたな。
恐らく八重木の事だからそれは、鼻だけを封じるという意味でなく、
鼻も封じるという意味だったんだろう。

なんじゃそりゃ・・・。
僕、呼吸困難で死ぬじゃん。

そんな事を思いながら、
場を去っていく八重木の後姿を見送ることぐらいしか、
今の僕にはできなかった。

Yaegi kotoha 005

ガラッ！！！

勢いよく、玄関の扉が開く。

仲良し姉妹のお出ましだ。

「兄ちゃんなにしてんのッ？」

「歩、早く牛乳買ってきてよ～～」

お前ら・・・。

扉ひとつへだてただけの向こうの空間で、今までよく無事に生活していたな・・・。

「んんん、んんん～んんん！！」

「は？なに言ってんのッ？？」

「んんん～んんん！！！！！！」

翻訳。

一言目は、

「口が、開かね～んだよ！！」

って言ってて、次のは、

「開かね～んだよ！！！！！！」

って言ったわけ。

「なんなの兄ちゃん、意味不ッ！」

「んん～～～～！！！！」

「・・・・・・・・はぁ・・・・。」

「兄ちゃん、さっきなんて言ってたワケッ？」

「うんうん、なんて言ってたの～？」

「お前らの鈍感さには心底驚いた・・・」

「ふむッ。」

「広辞苑　どん－かん【鈍感】感じ方や感覚がにぶいこと。「－な人」⇔敏感」

「広辞苑　しん－そこ【心底】1．心の奥底。本心。しんてい。2．（副詞的に用いて）心の底から。「－惚れた」」

「明鏡国語辞典　おどろ・く【驚く】予想しなかったことに出会って心の平穏を失う。びっくりする。以下省略。」

「お前ら・・・広辞苑だけでは飽き足らず、明鏡まで丸暗記したのか？！」

「そんなわけないじゃんッ」

「うんうん～」

「よかった・・・さすがに、そこまで引き離されると、長男の尊厳が失われると・・・」

「あのねぇ、歩〜」
「私達はッ」
「百科事典マイペディア〜」
「漢字源ッ」
「ジーニアス英和辞典〜」
「オックスフォード現代英英辞典ッ」
「プログレッシブ和英中辞典〜」
「家庭医学大百科ッ」
「その他色々を〜」
「すべてたしなんでるんだからッ！」

「自分達の知識を不当に低く評価された事に怒っていたのか?!」
「だって、明鏡くらいもう随分前に1日で暗記したもん〜」
「だよねぇ、姉ちゃんッ」

なにこいつら、マジで最強じゃん・・・。

「広辞苑　さいーきょう【最・・・」

「もういいわっ！！！」

だいたいなんなんだ？！

読心術か・・・？

「広辞苑　どくしんーじゅつ【読心術】顔の表情、筋肉の微細な運・・・」

「だからもうやめろって！！」

「ついでにお兄ちゃん。「マジ」という言葉は、辞典にはカタカナで載っていないからッ」

「平仮名なら載っているというのか？！」

「あるに決まってるでしょ～？辞典をなめないでよ～」

この会話・・・。

なんだか俺のせいで頭脳レベルが下がっているな・・・

「とにかくッ」

「早く牛乳買ってきてね～」

「はいはい」

「はいは1万回ッ」

あえてツッコみません。

「はいあひあい」

「あいは5万回～」

「あいあいあいあいあい愛あいあいあいあいあいあい愛あいあいあいあいあ

いあいあいおいあひ」
「あひは１０万回ッ」
「あひあひあひ・・・ってオイ！遊んでないか？！」
「うんッ」
「うんは２回～」
「うんうんッ」
「妹には甘いのかよ！！」
「まぁ、とりあえず早く買ってきてねッ」
「はいはいはいはいはい！！！！」

仲良しこよしシスターズは、満足して居間にもどっていった。

白桃歩。

僕は改めて洗面台の鏡を凝視する。

水洗いで接着剤がとれたのは奇跡だが、唇の皮が少しはがれた。

「悪魔を通り越して、閻魔大王みたいな女だな・・・」

心なしか、悪魔よりも閻魔大王の方が穏やかなイメージが俺の中にあった。

偏見に気づく午前１０時。

では、言い直そう。

「悪魔を通り越して、閻魔に毒入りの塩を送る神様みたいだな・・・」

神様という偏見につつまれているのを良い事に、

敵をこっそり殺そうとする。

これこそが極悪人への例えとして一番上等なものかもしれない。

その後は何事も無く、
近所のスーパーが開いたので
コンビニではなくそっちへ向かって牛乳を買った。

ぼ～っとしてたから、間違えていちご牛乳を買った。

姉のちひろ及び妹のちぃに叱られるかとは思ったが、
案外いちご牛乳にはしゃいでいた。

いちご牛乳にはしゃぐ、天才高校生姉妹・・・。

偏見に気づく、午前１１時だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0338i/

白桃の歌

2010年11月6日14時04分発行